
睡蓮

美波可奈

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

睡蓮

【Nコード】

N5170E

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

地球が涙を流して。 月が消えて。 太陽が落ちてきても。

Call my name 1

いつもこの空を見上げていた。
いつか私を解放してくれる誰かが現れるって。

私が見える人間はごく限られてるって言う。
そう遥か昔私を造った古代日本人が言っていた事を思い出す。

多分お前を見える奴は赤ん坊みたいに純粋な心を持ってるんだろうな。

泥臭い欲望にまみれて。

その中で純粋さを保つのはとても難しい事なんだよ。
だけどそんな奴が此処まで来て。

お前を見つけて。

世界を救うって俺は信じてる。

そう言って。

私を造った古代日本人は息絶えた。

昔々その昔。

それこそイカロスが太陽の塔を目指したように。
古代日本人は黙々と私を造って。

空の上に届くような塔を地球の中心に造った。

その技術は今も誰も知らなくて。
私だけ遺された。

だから私は待つてる。
私を見つけてくれる誰かを。

Call my name 2

ICコンピュータの中って意外と快適なんだよ。
私を造った古代日本人が言ってた。

暑くも寒くも無い空間で。

お前を見つけてくれる人が来る事を願うって。

古代日本人は女の身で塔を造り。

いつか来る大災害の予兆を皆に訴えていたのに。

皆はバカにして聴かなかった。

その報いだと自分だけ塔に登り助かればよかったのに。
私を造り言っただ。

「いつかやり直したいと思ったときに手遅れだったら悲しいじゃない？」

「一回ぐらいならきつと神様だって許してくれる。」

彼女は誰にも知識も技術も教えないで死んだけど。
その分半永久的に生きる私を造った。

ドウシテ？

そんな人間死ねばいいのに。
自業自得なのに後世に私を残す意味が何処にある？

色々聞きたかったのに。

きつと精根尽き果てて私を完成させ逝ってしまった。

純粹な心を持った人間なんているわけ無いのに。

だけど私は待つてる。

矛盾してるかも知れないけど。

赤ちゃんみたいなの心の持ち主。

純粹で穢れなくて。

それこそ太陽みたいな。

太陽みたいな心の持ち主。

温かくて。

涙が出そう。

私を造った古代日本人は綺麗だったな。

綺麗な心の持ち主。

ガラスみたいに繊細な。

あなたを好きだったよ。

髪が長くて。

黒い服を着て。

瞳が大きくて。

口ずさむ歌はチャイニーズ。

私に話しかけるのは英語か日本語。

一体あなたは何ヶ国語話せたのだろう？

あなたの背中を私は覚えてるよ。

The regend 1

「はくく。死ぬかと思った。」

僕は装着していた羽根を取る。

この黒い羽根は太陽の熱を吸収するんだって。

だから白い羽根より燃える確率は少ないと親友の理科学者が言った。

それをバカにする奴は白い羽根と共に燃えてしまった。

燃える瞬間後悔する。

でも後悔は遅すぎて。

人間がバカな所為で。

異常気象は止まらなくなってしまった。

雨すら降らなくて。

灼熱に焼かれたコンクリートの建物は僕が蹴りを入れただけで砂になってしまった。

雨を待つ地上の人間は嵐を願ったけど。

台風すら起こらないくらい地球は乾いてしまった。

河は乾涸びて。

海は塩が浮いてきちゃった。

元々地球は悲鳴を上げていたんだ。

それは文明が出来上がった昔じゃなく。

つい最近のこと。

だって狂ってるとしか言いようが無いでしょ？

僕が昔見た蒼い空は今でも変わらず蒼いけど。
雲ひとつ無い空が永遠と続く。

どうかしてるとしか言いようが無いでしょ？

僕が住んでる日本じゃ布団を干す習慣があつて。

うちの親は吞気だから。

布団も洗濯物も沢山干せて良いわねって。

悠長な事言つてたけど。

僕は危機感を覚えて。

気象のプロになろうと思った。

風向きや前線。

そんなのが判ればどうにかなるだろうって思つてた。

そして気象庁の中樞に入つてわかつた。

もうお手上げだつて事。

何で？

そんなの1番僕が知りたい。

お手上げだつて誰が決めたの？

The regend 2

だけど判ってる事は。

僕たち人間が好き勝手やってきたツケが回ってきたって事。

人が増えたから建物を建てて。

ゴミが増えたから海を埋め立てて。

足がある魚が生まれても。

最初だけちよつと騒いで慣れていく。

食べ物が無いから人工授精させて。

拳句奇形が生まれたと騒ぐ。

そして気づいた気象のプロたち。

このままでは人間は破滅しか道はないと。

僕はただ単に神さまが怒ってるんだと思うけどね？

それは本当に繰り返さないように謝るしかないと思うんだけど。

だから僕は志願したんだ。

昔からの言い伝え。

僕の住んでる日本では。

背中に装着する羽根が開発された。

それは中国大陸のと真ん中に。

昔イカロスが目指したと言われる太陽の塔があつて。

その塔を登り切れば。

異常気象を止める装置があると。

但し登り切った人間は1人もいないって。

気象のプロたちで結成されたチームは。
白い羽根で登るつもりだった。
でも太陽にあまりに近すぎて。
羽根だって溶けちゃうんだ。

そう言われてたから。
土壇場になって辞退する人が続出して。

だから僕は志願したんだ。
まだ大事な人に会ってないから。
会わないうちに。
尻込みする前に。
空を飛んでみたかった。

どうせ苦しむのなら。
力一杯生きたい。
そう思った。

そして出来るなら地球が滅亡しなければいい。

僕の力はきつと小さくて。
だけど。
だけどね。

銀貨にだって言っただけど。
僕は空を飛んでみたかったんだ。

My decision 1

もし神さまがまだ僕たちを許してくれる気があつて。
僕が其処へ辿り着けなかったとしても。
誰かが僕の遺志を継いでくれるつて。
そう信じてるから。

もし僕が辿り着けたなら。
神様に謝り倒して。

雨を降らせて貰うんだ。

謝るなんてかつこ悪いよと誰かが言つてたけど。
でも悪い時に謝るのつて当然でしょ？

勿論その代償はあると思うけど。

僕のようなちんけな人間の命で良いんなら。
それでも構わない。

呑気なうちの両親は。

僕の決意を聞いて案外冷静にこう祈つた。

「神さま。どうかこの子をお守りください。」と。

「…睡蓮。本当に行くのか？」

派遣が決まつた日。

親友の銀貨がこう言つた。

古来の日本では苗字というものが在つたらしい。

だけど現在の日本では苗字というものは存在しない。

佐藤とか鈴木とか田中とか。

そんなのは意味を成さなくなった。

代わりに僕みたいに花の名前とかお金の名前とかが主流になった。

銀貨がいるって事は日本中探せば金貨だって銅貨だっているはずで。鈴蘭だって薔薇だっているはずで。

銀貨は僕が氣象庁に入庁した時に同期になった。

年は銀貨が1個上で。

甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる。

美人な年子の姉ちゃんもいて。

姉ちゃんは雛菊だった。

そして言うんだ。

同じ氣象庁だけど専門の違う僕に。

「黒い羽根で行け。」と。

白い羽根は燃えやすいから。と。

親友の理科学者がそう言うんなら。

反対する理由も無いし。

だから迷わず黒い羽根を選んだ。

「マジだよ。マジ。ちょっと行って来るだけだから。」

本当は怖くて泣きそうだったから。

軽い口調で言った。

燃えて死ぬなんて最悪って思うけど。

決心したんだから後ろは振り向かない。

「行けよ。」

銀貨は最後にこう言った。

決めたのはお前だろ？

強い口調で。

黒い羽根を託して。

大空を飛んで。

あの塔のてっぺんを目指して。

「俺たちの分まで謝って来い。」

銀貨が背中を押してくれた。

理想は御伽噺の勇者みたいに。

胸を張って生きていく。

…僕ね。生きて還ってくるから。

だから神さま。やり直す術を教えて？

身勝手で我侭で本当にごめんなさい。

My decision 2

本当は一ヶ月ほど前。

銀貨と大喧嘩したんだ。

銀貨は僕の事が心配で一緒に塔に登ると言った。

僕は登って欲しくなかった。

だって命かけるのは僕1人で良い。

そう思ってたし更々一緒に行く気なんか無かった。

銀貨の姉ちゃんだって僕に言った。

「銀貨を連れて行かないで。」って。

僕は笑って。

笑って言った。

「そんなつもりは無いよ。」って。

そんな風に思われるのは心外だったし。

銀貨と一緒に登ると言ったから。

僕は全力で固辞しようと思ってた。

でも信じてくれなくて。

僕の事黒い悪魔だと言ったから。

黒い羽根をその時背中につけて実験してたから。

「雛菊。それは酷くない？」

思わずそう言っちゃった。

だって。

だつて雛菊は言うんだ。

「だつて。あなた銀貨の事好きでしょ？」
恋愛感情で。

…僕は打ち抜かれた気がした。

「…それは雛菊の取り越し苦労だよ。」

僕はやつとの思いでそう呟いた。

僕は自分の気持ちは恋愛感情じゃないと思つてゐる。
そしてこれからも発展したいとは思つてない。

銀貨の事大好きだけど。

最初から一緒に行つてもらおうなんて思つてもみなかった。

「うちの大事な弟頼むから連れてかないでよお…。」
そう言つて。

雛菊は泣き崩れた。

…派遣が決まつて。

僕は胸を撫で下ろした。

体力審査で銀貨はひっかつたから。

派遣が決まつて。

僕は尚更喜欢いなものを作らないでおこうと思つた。

雁字搦めの感情はどうにもならないけど。

銀貨は僕にこう言つた。

「お前さ。逃げてるだろ？」
的を射てて。

「…逃げてるよ。」

嘘はつけなかったけど。

でも僕は。

胸を張って言ったんだ。

「大事なもの見つける前に派遣が決まって良かったよ。」

本当は未練タラタラで。

だけど。だけどね。

心は痛いけど。

目の前のあなたが。

死なないで済むように出来るかもしれない。

それだけで僕は嬉しい。

本当に嬉しい。

滅亡の時代を生きてるけど。

この異常気象を止められるかもしれないから。

もし僕が志半ばで倒れたらその時はよろしくね？

口に出したら怒られそうなことを思う。

その後聞いたんだけど雛菊と銀貨は僕の事でケンカしちゃって。

僕がそれに口を挟んで。

また更にケンカは大きくなっちゃって。

黒い羽根で行けと銀貨はケンカしても変わらずそれだけは言ってくれた。

だから余計に僕には思い入れがあるんだ。

この黒い羽根に。

Seven nights seven days 1

太陽の塔に初めて地上から登って来た人間は。

結構日に焼けて紅かった。それは燃えなかった証でもあるけど。
黒い羽根を背中につけて。

宛ら世紀末を伝える黒天使みたいに。
魔女の使いの鴉みたいに。

髪も瞳も真っ黒で。

私はいよいよ迫った世紀末の声を聴いた気がした。

私はICコンピュータの中で息をひそめていた。
さぞかし外は暑いだろう。

私を造った古代日本人が言ってた。

「きつとこの塔に着くのは日本人ただ1人だよ。」

あなたはそう言いながら。

古代日本語を其処に彫ってたね？

ただ1つのあなたと未来の誰かを繋ぐ伝言。

あなたが信じてこの塔に登って来た人間は。

石碑の前でこう言った。

「日本語じゃん？」

あなたの言う通りになったね？

「…ここが頂上か。」

僕のチームは9人編成だった。

カメラマンとチーフと。

気象予報士2人と。

僕みたいな立候補生5人。

その中で理科系は僕1人だった。

そして生き残ったのも黒い羽根を選んだのも。
僕1人だった。

皆燃えて燃えて燃えて。

僕もいつ自分の番が来るかと思ってた。

確信なんて無かった。

見えない死神が刻一刻と迫ってきてるみたいに。

でも僕と皆と決定的に違う所は。

人の言う事に耳を傾けて。

忠告は取り敢えず聞き入れて。

他と違う事を恐れなかった事。

僕だけ浮いてた事知ってたよ。

僕の黒い羽根を見てあいつ本気かの視線送ってきてるのだって知ってる。

だけど大好きな理科学者が僕を思ってそう言っんなら。

性能だって何一つ違わなくて。

色だけが違うだけなら。

拒否する理由が無いじゃない？

白い羽根で飛んだ報いは僕を除く皆に跳ね返ってきた。
それは死を意味していた。

だから銀貨は必死で止めたのに。

結局最後の最後まで手遅れになるまで聞き入れなかった。

まるで古くから伝わる御伽噺よろしく。

横並び日本人の典型的な考え方。

赤信号皆で渡れば怖くないってか？

僕はね。偉くもなんとも無いけれど。

横並びで人と一緒のことするのが昔から大嫌いだった。

だけどね。目の前で燃えて死んでいく仲間を。

何としても助けたかった。

本当に助けたかった。

Seven nights seven days 2

その人間は私の前へ立って。

私の中枢とも言えるスクリーンを覗き込んだ。

「あちゃ〜。これは英語？」

スクリーンには英語で映っていた。

とても難解で緻密で綿密で。

私を造った古代日本人のあなたが。

そんな私を見て苦笑いしたっけ？

人間の英知を一身に集めたようなあなたが。

私を造り。

自由自在に各地の言葉を操るあなたが。

唯一苦手とした言語で。

私をプログラミングした。

私に話しかけるときは。

英語だったり日本語だったり。

歌を歌うときはチャイニーズだったね。

そして石碑は古代日本語で彫ってたね。

「通じるかなあ？」

僕って英語苦手なんだよね。

私のスクリーンを覗いて。

黒い羽根を外しながら。

登って来た人間は小型の機械を出した。

それは多分ここ数十年の間に爆発的に普及した人間と人間を結ぶ通信機。

人間と人間を繋いで情報交換が出来る機械。

でも私の電波は弱くて。

見る間にシャットダウンした。

.....。

真っ暗闇の中で。

のんびりとした声が響く。

「ありゃ。シャットダウンしちゃった。」

古代日本人がよく言ってた。

私の唯一の弱点は地上波だって。

「でも未来では電波は沢山だろうね？」と。

「ごめんね。ちゃんと復旧させるから。」

僕は砂煙になったスクリーン相手に呟いていた。

昔の文献に書いてあった伝説。

ノアの箱舟みたいに数百年前。

僕たちが生まれるずっとずっと前。

女の人がたった一人でこの太陽の塔を造ったんだって。

中国大陆のと真ん中に。

バカにする人たちは口々にこう言った。

「未来なんか考えなくても地球はそんなに脆くない。」と。

でもその人は夢を見たんだって。

俗に言うビジョンってやつ？

砂漠化した日本と。

ほぼ海に浸かってしまった中国大陆と。

でもその人の志は高く。

中国大陆のど真ん中に1人で来て。

万里の長城だって月から見えるから。

そう言ってでっかい塔を建てた。

見よう見まねの左官の技術と。

たった一つの道具を持って。

その人を神様は見捨てなかった。

食べ物や鳥が運んできたし。

寝る時は同化できた。

そして異常気象を止める装置を発明したと言われている。

Seven nights seven days 3

今日は七夕だって。

僕たちの日本では短冊に願いを書いて祈る。

たった年に一度だけ。

思えば2週間前は編成チームの誰も死んでなかった。

2週間前は地上に居たんだって改めて思う。

たどたどしい英語で理科学者が説得に必死だったわけ？

織姫と彦星は今日は必ず会えるね。

だって雨が降らないから。

今年のエイプリルフールの日。

月が消えた。

突然何の前触れも無く。

忽然と月が消えた。

地球上の何処へ行っても月は見えない。

雨は降らない。

月が消えた。

そして太陽が何だか近くに見える気がする。

温暖化は激しくて。

北極の氷はもう溶けて無くなっちゃった。

海面上昇は著しく。

僕の出身地震町も地震の隆起で山肌の間で雲の形で取り残されてしまった。

それでも空は高く。

雨は降らない。

太陽は近くに来ていて。

地球規模での平均気温は50度だって。

僕はずっと心の中で祈ってる。

短冊に込めた願いは。

他の人とちよつと違って。

皆幸せになれますように。

儚いけどそう願った。

そして今でもそう願っている。

僕の生き方はきつと間違ってるかもしれないけど。

大事なものを作らないように生きてきたけど。

僕が女だったら。

きっと銀貨に告白して傍にいて欲しかっただろうなと思う。

滅亡の時代を歩んでいても。

自分だけよければきつと良かっただろうと思う。

僕がもし。

ここで異常気象を止められる装置を使いこなせたら。

もしかしたら地上の銀貨たちに未来を渡せるかもしれない。

そう思ったら自分の人生も悪くはなかったって思えるかな？

死ぬのは怖いよ？

だけど頑張ってみるから。

A gift for the EARTH 1

目の前の彼は復旧の赤いボタンを押した。

キュウイーン……

再作動は私を造った古代日本人でも難しかったのに。
いとも簡単に目の前の彼は私を再作動させた。

画面に映る彼の顔は真剣そのものだった。

私が電波に弱いから。

小型の通信機器は電源を切ってしまい。

だから私はスクリーンに英語を映してみた。

「What are you looking for？」

目の前の彼は。

それに気づいた表情で。

手元にあつたキーボードでこう叩いた。

「A gift」

ギフト。

それは贈り物の意。

私は思わずこう映した。

「Why do you say "A gift"？」

「So I will do anything for the

EARTH

「YOU?????」

地球は大文字で。

じゃあ私が見えるの？

「So could you see my vision?」

私が待っていたのは彼だったの？

私が見えるの??

本当に???

「見えるよ。君でしょ?」

私のスクリーンに向けて。

彼は手を差し延べた。

多分母国語の日本語で。

あなたは言ってたね。

赤ん坊みたいな純粋な心の持ち主が私の姿を見えるって。

それも日本人だって。

そんなのいる訳無いって否定していたけど。

こんなにも嬉しいのは何故？

嬉しくて嬉しくて。

私は彼の手をとった。

温かい彼の手は。

生きている証。

無事に塔に登りきった証だった。

A gift for the EARTH 2

「ごめんね。驚かせちゃって。」

僕は内心びっくりしながらスクリーンに手を出した。

半透明な女の人スクリーンから現れて。

ホントびっくりしちゃった。

日本語ではダメなのかなって思いながらさっきから画面に打っていた。

英語も高度になると僕には使いこなせないから。

画面を見て僕でも判り得る英語だったから思わず打った。

僕は淋しかったのかもしれない。

仲間は燃えて死んでしまつて。

地上の銀貨とは連絡を取れなくて。

沈黙がイヤだったから。

僕は日本語で話しかけた。

「雨を降らせて欲しいんだ。」

唐突だったけど何か言わなくちゃって思つて。

僕がここに登つて来た経緯だとか。

悪意は無い事だとか。

だけど1番言いたかったのは。

「雨がね。全然降らないんだ。」

「人間が愚かな所為でね。もうずっと前から判ってたはずなのに。」

その女の方は黙って僕を見上げた。
そして制して。

僕の額に手を触れた。

何ともいえない感情が次から次へと溢れて。
涙が溢れた。

もう手遅れなの？

このコンピュータも使えないかも。

絶望の鐘が鳴り響いてる。

もう終わりかもしれない。

君の手は半透明なのに生きてるかのように温かった。

「It's over」

君の口がそう開いたように見えた。

ごめん。僕じゃ無理だったみたいだ。

力が萎える。

僕は座り込んで。笑うしかなかった。

「ハハハ……」

走馬灯のように僕の頭の中で色んな事がフラッシュバックした。

ごめんね。銀貨。

ごめんね。雛菊。

ごめんね。先輩。

A gift for the EARTH 3

手を繋いでよく判る。

君の思ってること。

私は君の体温から感じる。

君の生きてきた足跡を。

君は両親に愛された子供だったんだね。

涙を堪えきれず涙を流した君のためにきつと。

私は造られたんだ。

「まだ。まだ終わりじゃないよ。」

まだ私を造った古代日本人の思いは遂げられてない。

古代日本人は死に際に私に言った。

「君が見える人間がこの塔を登って現れたら。」

「どうか助けてあげて。」

「バカな人間たちにあと一回だけやり直すチャンスをあげて？」

「君に思いを託すから。」

過去に思いを馳せて私は思わず古代日本人の名前を呼んだ。

「睡蓮。。。」

「…僕の事？」

僕は涙でぐしゃぐしゃの顔で半透明の君を見た。

「君は睡蓮って言うの？」

睡蓮。それは僕の名前。

苗字がなくなった日本で。

純粹に生きられるように両親が付けた。

君は頷いて。

「もう一回だけやり直しなさいって私を造った睡蓮が言ったんだ。」

僕は驚いて。

手を引かれた。

「ここが私の中枢。メインコンピュータ。」

半透明の君は僕の手をしっかりと握り。

そう言った。

伝説は伝説じゃなかったんだ。

昔の言い伝えって全部本当は嘘かもしれないって心の何処かで思ってた。

でも救われないから必死で塔を登って来た。

救われないから必死で出来得る限りのことをしたいと思った。

その横に日本語で彫られた石碑が在った。

「絶対日本人だって私を造った睡蓮は言ってたよ。」

半透明の君が力強くそう言った。

「私は人間なんて滅びれば良いって思ったけど。」

「睡蓮があまりに必死で石碑を彫るから可哀想になつて。」

「未来のことなんて放つとけばいいのに。」

「優秀だったんだよ。睡蓮。」

僕は石碑を解析始めた。

日本語でありがたかった。

英語だったらきっと僕の頭では理解できない。

過去からのメッセージ。

この塔を1人で造った同じ名前の女の人からの伝言。

最後にこう在った。

「あなたならきつとやり直せる。」

Epilogue

古代日本語で色々と説明が書いてあったけど。

要はメインコンピュータの左右にある赤いボタンを寸分違わず同時に押すって事だった。

その石碑によればこの太陽の塔はエネルギーを沢山蓄えていて。

そのエネルギーを解放する事によって低気圧を強制的に造ることが出来るらしい。

でもそれは僕の命が終わることを意味していた。

巨大なエネルギーに耐えられるような鋼鉄の体は持っていないから。ちっぽけな僕の命と引き換えに。

地球が助かればと願う。

たった一度の人生でこんな経験できる奴なんて滅多にいない。

そう思おうとしたけど。

足が竦んだ。情けない。

勇者になったんだと自惚れられたら良かったのに。

僕の事なんかきつと誰も知らないで雨が降ったと喜ぶんだろ。そう思うと怖かった。

生きてきた証さえ無くなりそう。

「自分がこんなに怖気づく嫌な奴だとは思わなかった。」

睡蓮がそう言うから。

「そんなもんでしょ？」

私はこう答えた。

あなたは純粋な心を持つてる。

だから私を見せて私に触れられた。

古代日本人の睡蓮みたいな強い人はなかなか居ないよ。

あの人は怖気づく事は皆無だった。

どれだけ腹を括ってこの塔を造ったんだろ。

「人間の英知を集めたような古代日本人があなたに遺したメッセージを無駄にしないで。」

私はそう言って赤いボタンの前へ立った。

それは私の自爆ボタンでもあり。

塔のエネルギーを解放するボタンだった。

「怖いよ。」

僕は情けなくて。

赤いボタンの前になかなか立てなかった。

「睡蓮。」

君が優しい声で。

僕を呼ぶ。

「1、2、3で押すよ。」

「いち、に、さん————……。」「
押した途端。」

僕は爆風で吹き飛んだ。

最後に見たのは君の姿。

半透明な君が僕へと手を差し延べる姿だった。

あなた。この子は睡蓮って名づけましょう。

睡蓮の花言葉は純粹。清純。信仰。

誰もが見えないものが見える人間になりますように。
その心で。

E
N
D

Epilogue (後書き)

やっと最後です。

編集が変なことになってしまい申し訳なかったです。
良かったら感想頂けると力になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5170e/>

睡蓮

2010年10月28日07時54分発行